小学校中学年以上

峠を越えて

菊地澄子 作
伊勢英子 画

913

峠を越えて

菊地澄子 作　伊勢英子 画

東京　小学館　昭和56 (1981)

142P　22cm

(小学館の創作児童文学シリーズ27)

峠を越えて

一九八一年十月二十日　初版第一刷発行　定価・七八〇円

著　者・菊地澄子
画　家・伊勢英子
発行者・相賀徹夫
発行所・株式会社　小学館（〒一〇一）
東京都千代田区一ツ橋二ノ三ノ一
電　話・東京〇三(二三〇)五五四三(編集)
五三三三(製作)　五七三九(販売)
振　替・東京八一一〇〇
印刷所・図書印刷株式会社

＊製本には、じゅうぶん注意しておりますが、万一、落丁、乱丁などの不良品がございましたら、おとりかえします。

＊本書の内容の一部または全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合は予め小社あて許諾を求めてください。

©1981 SHOGAKUKAN Printed in Japan

峠を越えて

菊地澄子作
伊勢英子画

大阪外国語学院図書館

装幀デザイン　中野博之

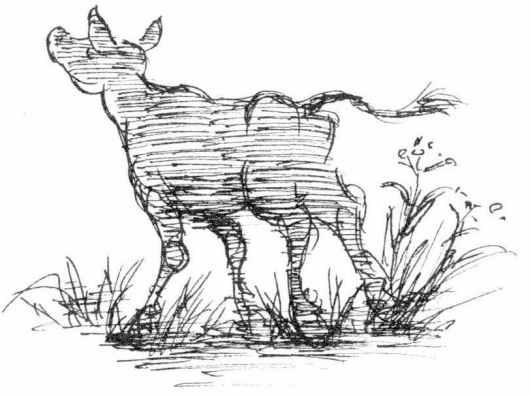
もくじ

峠を越えて

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

1 上滝橋の下で 8
2 その名は「ヤギべえ」 20
3 兄と妹 31
4 出産 42
5 松夫の夏休み 54
6 放牧 67

7 白い牛 79
8 金食い牛 93
9 保子の病気 105
10 別れ 115
11 峠を越えて 128
あとがき 142



菊地澄子（きくち　すみこ）
一九三五年、広島県に生まれる。昭和女子大学卒業。都立高校教諭をへて、養護学校教諭に。児童文化の会会員として、井野川潔、早船ちよ両氏の指導をうける。現在、日本児童文学者協会、日本子どもの本研究会の会員。主な作品として、「ひとりひとりの戦争」「はらぺこ戦争」「三つ子のおねえちゃん」など。
現住所／東京都八王子市めじろ台
一―四四―一

伊勢英子（いせ　えいこ）
一九四九年、北海道に生まれる。東京芸術大学デザイン科卒業後、フランスで一年間、イラストレーションの勉強をする。絵本、さしえの作品としては、「チョコレートにはリボンをかけて」「いじっぱりクッキー」「おだんごころころ」など。
現住所／東京都武蔵野市吉祥寺北町
四―二―三

峠を越えて

1

上滝橋の下で

山の木の葉が散りはじめると、日暮れの時刻が、ぐんとはやくなる。

本郷村の小学校では、十月から、下校時刻が三十分はやくなった。三年生以下は、二時二十分。四年生以上は、二時四十分に下校しなければならないのだ。

学校にちかい子は、うちに帰って遊ぶ時間がふえたといって、ワイワイ喜ぶ。しかし、三国峠を越えて帰る、野田松夫、保子の兄妹と、大島清の三人は、うちに帰ると、もうまっ暗で、遊ぶ時間などない。

峠越えをして通学する子は、みんなで待ちあっていっしょに帰ることが、学校のきまりになっているのだ。今年は、つごうよく、松夫と清が五年、保子が四年なので、三人とも二時

四十分組だ。しかし、松夫は、人一倍動作がのろく、おまけにひとりで帰ると、林にはいって小鳥の巣をさがしたりして、道草をするくせがある。

松夫は、一年生のとき、林にはいって遊んでいるうちに道に迷い、夜になっても帰らず、村の消防団員が総出でさがしまわったことがあった。このとき、千吉じいさんは、

「うちの松は、ひとりじゃ通わせられませんけ。来春、保が入学するまで休ませてよござんすかのう。」

といって、校長先生に休学を申し出た。しかし、校長先生は、集団下校させるからということで、休学をみとめてくれなかったのである。

松夫たちの家のある奥谷部落から学校までは、六キロ。ほとんどが林道で、人家はない。でも、山育ちの松夫たちは、ちっともこわいとは思わない。

ただ、十兵衛原の杉林だけはべつだ。

十兵衛原の杉林は、三国峠を北にくだって小さな土橋を渡ると、谷川沿いにびっしり一キロちかくつづく。昼間でもうす暗く、ぶきみな羽音をたてて、コウモリがとんでいる。杉林の中ほどには、江戸時代、十兵衛という男が、自分の子を殺した罪で処刑された、処刑場跡の敷石や井戸が残っている。つい、数年前にも、暗い杉林の奥に、旅人の首つり死体がぶら

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

さがっていたといわれる。
村の子どもたちは、小さいときから、
「いうことをきかないと、十兵衛原につれていくで！」
といわれながら大きくなってきたのである。
松夫も、どんな林の奥でも、人気のないほら穴の中でもこわくないが、十兵衛原だけはきらいだ。
九月も末になると、道草するのは松夫だけではない。清も保子も、雑木林にかけこんで、栗をひろったり、あけびをとったりしたものだ。でも、十月も終わりにちかいいまでは、急いで歩いても、三国峠を越えきらないうちに日が沈んでしまう。日が落ちると、いっきに暗くなりはじめるのだ。
三人は、本郷川に沿った県道を右に折れ、上滝橋を渡りかけた。そのとき、
「おい、しずかに……。だれか泣いとる……」
清が、とつぜん立ちどまって、人さし指を口にあてた。
「あっ！　ほんまじゃ」
保子も、ハッと息をのんで立ちどまった。
「な、きこえたろ。ほら、また泣いとる」

清が日焼けした四角な顔に、ギロッと目をむいてささやく。のろまな松夫は、キョトンとして、清と保子をみおろして耳をすました。

「なんも泣いとらんよう。清ちゃの耳がおかしいんじゃろう」

松夫は、いつものまのびした調子で、大きな声をはりあげた。

「あんちゃん、シーッ！」

保子が人さし指を口にあててにらんだ。

「なんも、泣いとりゃあせんよう」

いいながら松夫は、足もとの砂をつかんで、バラバラと、橋の下の淵に落とした。このとき、

「エーン……」

かすかなきごえが、松夫にもきこえた。

「向こう側の橋の下じゃ」

保子がいうと、清は首をひねりながら、

「だれか川に落ちたんかもしれんで……」

といって、かけだした。保子も、

「まさかあ」

といいながら、清のあとを追ってかけていった。
「あぶないけ、あんちゃんは、こないでよっ」
保子は、橋の上へ向かってどなりながら、枯れススキをかきわけて、土手をおりはじめた。
白いススキの穂が、保子のおかっぱ頭に散りかかった。
保子は、のろまな松夫の妹とは思えないほど、活発ですばしっこい。勉強もよくできるが、運動会でも、いつもリレーの選手だ。
「わかったよう」
松夫は、らんかんにからだをのりだして、まのびした声をはりあげた。
「エーン……」
また、かすかなきごえがした。
「あれ？　ドンガメ岩のほうで泣いたでェ」
保子がいうと、清が早口にいった。
「うん、ドンガメ岩のほうじゃ。おれ、岩の上からまわるけ、保ちゃんは下から行ってくれえ」
保子は、赤い実をつけたイガバラをふみつけて、まっすぐ川べりまでおりてきた。
「あっ！」

保子は思わず、あとずさりした。すぐ目の前のサカキのしげみに、白い動物の首がひっかかっているのだ。

「エーン……」

なきごえの主は、この白い首だった。

保子は、ジーパンのすそがぬれるのもかまわず、川にふみこんだ。白い首は子ヤギだった。

保子は、ポタポタしずくのたれる子ヤギをだきあげかけたが、なかなか持ちあがらない。

「あっ、こがなもんがついとるけ、重いんじゃ」

やっとひきあげると、子ヤギの胴にビニールひもがぐるぐる巻きに巻きつけられ、ビールびんのような石がくくりつけてあるではないか。保子がほどこうとしても、かんたんにほどけるものではなかった。ビニールひもが、川につきでたサカキの枯れ枝にひっかかって、沈まないでいたのだ。

子ヤギのからだは、猫を大きくしたほどなのに、肢だけはひょろ長かった。目をとじたまま、ぐたんと首を保子の胸にもたせかけた。

「おーい、清ちゃー。ヤギ、ひろうたでー」

保子は、石と子ヤギをいっしょにかかえて、ドンガメ岩に向かってどなった。

「なにっー、ヤギだったのかーっ」

どなりながら、清が岩からおりてきた。
「なーんだ、死にぞこないのヤギかあ。これじゃあ、おもりが小さすぎるよ」
「おもりって？」
「楽に死なしてやるには、もっと大きい石をつけにゃあ……」
「……」
清はおもりの石をつけなおして、自分で沈めてやるというのだ。
「清ちゃは、ざんこくなことをいうのう。とにかく、あんちゃんにみせてやらにゃあ」
「じょうだんじゃないよ、保ちゃん。こんなヤギ、松ちゃんにかかったら、ぬいぐるみのおもちゃのようにされちまうで。飼うなんていうて苦しめるより、ここで水葬にしてやるほうがしあわせでェ」
「……」
保子の腕に、ぬれた子ヤギのからだの、かすかなぬくもりが伝わってくる。
それでも清は、ヤギの乳をしぼるためには、子ヤギは産まれるとすぐ土に埋めるか、こうして川にすてるのだといいはった。
「そうしないと、せっかく乳が出ても、子ヤギにみんなのまれてしまうんだ。うちでも、前にヤギ飼うとったけど、産んだ子はぜんぶ、おれととうさんとで葬ってやったんじゃ。肉を

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com